

(別紙) 成果報告書

健診の重要性の認知 (PR) について

静岡県立大学 薬学部 分子病態学分野

指導教員：教授 森本 達也

参加学生：宮崎雄輔、船本雅文、衣斐遥、佐藤光、清水果奈、清水聡史、鈴木杏奈、筒井裕介、源平麻衣、佐々木華、本多大樹、村田騰行、藪田亜沙美、北條裕也、櫻井涼賀

(以下本文)

1. 要約

年1回の健診は自らの健康づくり・疾病予防のため非常に重要であるが、働き盛りの40代50代は時間がとれず、健診受診率も低い。しかしながら、生活習慣病の発症時期は若年化しており、健康寿命の延伸のためには、若い世代での生活習慣病の発症予防・重症化予防と介護予防が重要である。そこで20-50代中心に地域住民に対する健診受診の啓発活動を行う必要がある。

我々は静岡信用金庫草薙支店またはJAしみず草薙支店と連携し、健診と健康寿命の重要性についての講演会と様々な簡易検査による健康度測定を2回実施した。各回ともに30名以上の市民が来場し、非常に盛況であった。年代としては60-70代が最も多かったが、30代から80代まで幅広い年代に参加していただくことができた。健康度測定も通常の健診ではあまり扱わないものもあったためか好評であった。また実施したアンケートでは、特定検診を受けてみたいと回答者の全員が答えており、健診の重要性および意義の認知には貢献できたと考えている。一方、参加者の89.6%は特定健診の受診経験があり、もともと健康に関心を持っている人が多く参加していた。今後、いかに健康への関心の薄い層に受診の働きかけを行っていくかが課題である。

2. 研究の目的

本研究課題の目的は以下の通りである。

- ①親世代の40～50代の受診率が向上するような動機づけをすること
- ②地域ぐるみで年1回の健診受診に繋がるような働きかけをすること
- ③若い20代から取り組むことの出来る健康づくりを行うこと

3. 研究の内容

本研究課題では以下の3つの項目を実施した。

- ①健診・健康についての講演会
- ②健康度測定 (各種簡易検査)
- ③健康相談 (医師、薬剤師、看護師、保健師、栄養士)

4. 研究の成果

(1) 当初の計画

本研究課題の申請時の予定は下記の通りである。

- ・地域の商店会や農業団体などと連携し、禁煙、血圧管理、食生活の見直しなどを中心とした「健康寿命延伸」のための講座やセミナーを実施する
- ・健診機関と連携して、個人の健康寿命予測の「見える化」によって健康診査を推進するイベントを立案・企画する

・これらのイベントの立案・企画・運営には、学生の参加を促し、学生への自らの健康づくり・疾病予防行動にむけた啓蒙活動の一環とする

これらの活動を通じて、大学生が健診や食事・運動・飲酒・喫煙等の生活習慣を考える機会となるだけでなく、その親世代の年1回の受診行動に繋がり、住んでいる地域の健康感の育成に発展することが理想形である。

(2) 実際の内容：A 予定通り

理由：部屋ごとに実施項目を区切り、参加者の動線を作った。また参加者も2つのグループに分けて誘導することで、特定の検査項目に参加者が集中しにくいよう配慮した。スタッフも各検査ごとに1-2人ずつ配置し、参加者の待ち時間が短くなるようにした。実際ごく一部の検査を除いてはスムーズに進めることができた。

(3) 実績・成果と課題

各回30名以上の参加者があり、非常に盛況であった。当初目標としていた20-50代の参加者も日曜日開催の2/5に限ってみれば28.6%参加していた。また平日である月曜日開催となると、やはり女性、主婦の参加が大半であった。

ほとんどの参加者が実施した検査項目のすべてを受けており、特に内臓脂肪測定への関心が非常に高かったようである。

健康相談コーナーも普段の受診時にはなかなか聞きにくいことや、時間が取れず相談できないことを相談できた、と好評であった。具体的には、サプリメントと医薬品との相互作用にはどういったものがあるのか、どういった場所で自分の飲んでいるものの相互作用については確認してもらえるのか、などが聞かれた。さらにアンケートからも回答者の全員が健診を受ける気になったと回答しており、本研究課題の目標である「受診率の向上するような動機づけ」には成功したと考える。

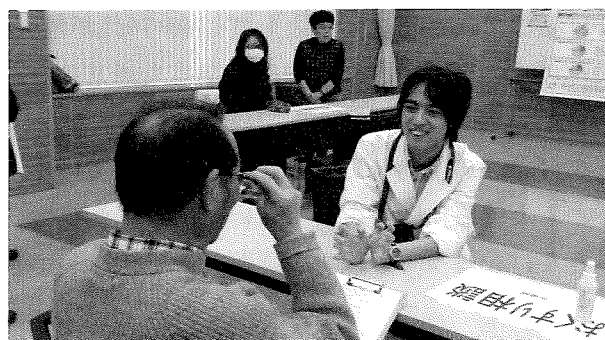


写真1. 大学院生によるお薬相談

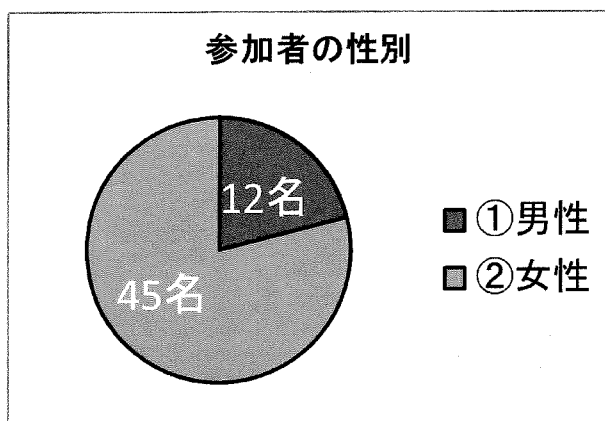


表1. 参加者の性別

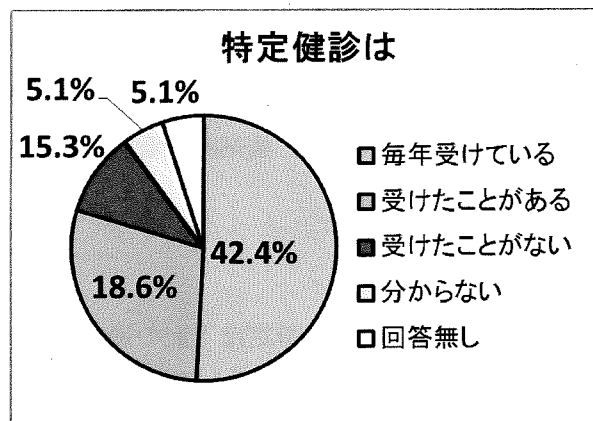


表2. これまでの特定健診受診率



その一方で、参加者の50.8%は特定健診を毎年受けており、受診経験のある人まで含めると89.6%に上った。もともと健康に関心を持っている人が多く参加していたことがわかる。今後、いかに健康への関心の薄い層に受診の働きかけを行っていくかが課題である。

写真2. 大学院生による脳年齢測定・認知症診断

(4) 今後の改善点や対策

各回ともに盛況であり事前の予定人数以上の多くの来場者に恵まれた。その一方で、一部の検査器具は使い方指導に時間がかかる(肺機能検査のスパイロメーターや脳年齢・認知機能検査用のタブレット端末)ため、参加者が一部の検査で待たされる状態となった。幸い参加者からの苦情等はなかったが、誘導スタッフが十分確保できなかったこともあり検査スタッフが誘導も行うこととなり負担が大きかった。

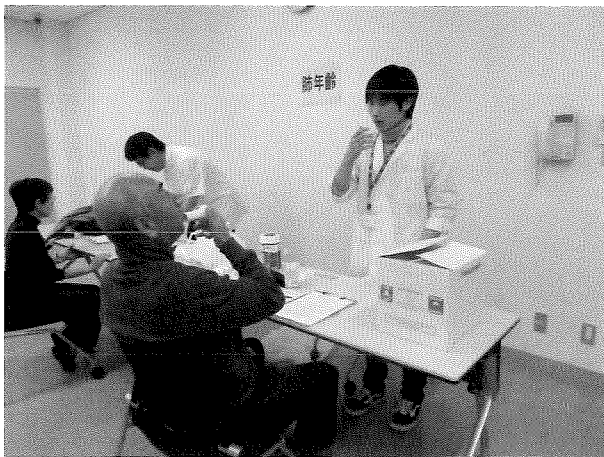


写真3. 薬学部生による肺年齢測定

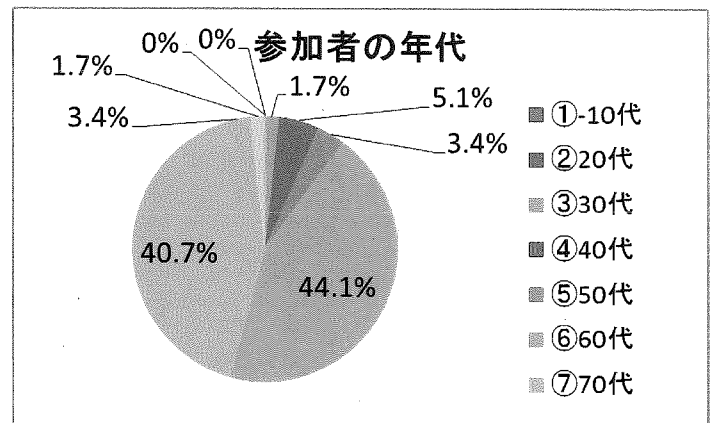


表3. 参加者の年代

5. 地域への提言

元々本大学周辺は地域での活動が活発な地域である。地域でのつながりが深いこともあってイベントを実施すると多くの参加者に恵まれている。今後も同様のイベントを開催する機会があれば、是非近隣の方を誘って来ていただきたい。今回は60-70代の参加者が目立ったので、今回の参加者の子どもの世代を巻き込んでいけると、地域としての健診の重要性認知が高まり、より健康寿命を延ばすことにつながると思う。

6. 地域からの評価

実施している会場では「なかなか測る機会がないからうれしい」、「自身の状態をちゃんと知るいい機会になった」、「普段よくわからないことを聞いて良かった」などの声が聞かれた。また、2/20に実施した際は本学看護学部棟で実施したため、「大学に入る機会はないから新鮮」、「学園祭の時にもこういったことはやってもらえないのか」といった意見もあった。参加者からの評価は好評であったと考える。

